

# の評伝の エーリック・フロム

ゲルハルト・P・ナップ 滝沢正樹・木下一哉

Propriety of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.  
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.  
Veröffentlichungen – auch von Teilen – bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



新評論

Knapp, G. P., 1994: The Art of Living. Erich Fromm's Life and Works (Japanese), Tokyo (Shin-hyoron) 1994, 320 pp.

## 日本語版に寄せて

ノンフィクション作品、ことに学術書の著者なら誰しも感ずることでしょうが、自分の著書が、文化背景を異にする別の言語に翻訳されて陽の目を見るのは、この上ない喜びです。著作が孤独な作業であるだけに、書き上げた作品はできるだけ幅広い読者層の目に触れ、読者との心の交流ができるよう願うものです。翻訳によって、言葉の壁が取り払われ、批評の対話に加わる人の数を大幅にふやすことができます。そういう意味で、エーリッヒ・フロムの理論を日本の読者に紹介し、国際的に進められている社会批判論議の幅をさらに広げることが、本書の狙いでありませう。

『評伝 エーリッヒ・フロム』(原題『アート・オブ・リビング』)は、そもその初めから、数カ国にまたがる大仕事でした。申すまでもなく、エーリッヒ・フロムの生涯と活動は、ヨーロッパと北アメリカの二大陸にまたがり、多くの国々の思想形成に深い影響を与えてきました。私自身もドイツに生まれ、フランクフルトで、時代こそ違えフロムと同じ大学に通って学問を積みました。私の学問上の師のなかには、批判理論の創始者であるセオドル・W・アドルノとマックス・ホルクハイマーのお二人もおられました。このお二人は、フロムの思想形成期の一時期、フランクフルト社会研究所の同僚としてフロムに影響をあたえた方々です。その後私は、人生のほぼ二五年間をずっと北アメリカで過ごしてきました。旧大陸と新大陸の両方で得た私の経験が、フロムと社会理論一般にたいする私のアプローチと切っても切れないものになっていることは確かです。本書の下準備と実際の執筆にあたって、私は、フロム

Gerhard P. Knápp  
**THE ART OF LIVING**  
Erich Fromm's Life and Works

© Verlag Peter Lang AG

This book is published in Japan  
by arrangement with Verlag Peter Lang AG,  
through The English Agency (Japan) Ltd.



が活躍し、フロムの社会批判理論が形成された両大陸の各地を、調査のため一度ならず訪れました。大事なことを一つ言い残しましたが、本書は最初にニューヨークでピーター・ラング社から出版されました。同社は、欧州のど真ん中スイスにルーツを発する真に国際的視野をもった学術出版社であり、スイスは一九三〇年代にエーリッヒ・フロムが病後の療養のため数カ月を過ごしたところでもあります。

しかし、本書の出版に到るまでのいきさつ（一部は明らかに個人的な）よりもはるかに重要なのは、本書の日本語訳の出版が、今日の日本社会内部でのエーリッヒ・フロムに対する関心の新たな高まりを示すものだという事です。これは何も不思議なことではありません。日本の文化的・歴史的背景は、北アメリカやヨーロッパのそれとは著しく異なっています。二〇世紀末の最も高度な発達をとげた脱工業化社会であるという点で、多くの相通する側面をもっています。フロムの著作にはそのことがたゞぶり記述されています。そして、フロムの第一の関心が、必然的に北アメリカの状況にあったにせよ、似たような状況は各地で容易に見いだすことができます。共通分母をいくつか挙げてみましょう。通商と技術、そして、前もって選ばれた情報の迅速な伝播が、現代の経済大国に共通する時流です。実用的動機が無数の領域で長いこと人間的動機に優先してきました——あるいはそう見えます。技術の進歩と、市場/利潤志向社会のあらゆる面に行き渡ったプラグマティズムが、市場性のない個の成長と選択の自由の余地をますます狭めています。先進工業諸国の灰色の化け物である消費主義が、次第に何千万もの人間の心の様相を表すものになってきました。人類にとって、文明の病弊のほうに、文明の明らかなき恩恵よりも大きくなってしまったように見えることもしばしばです。社会的欠陥をもっとも鋭く分析・診断した学者のひとりであるエーリッヒ・フロムは、一方では途方もない経済成長の甚だしい不均衡について、また他方では、個々の人間の貧困化について雄弁に論じています。現に同調主義がはびこ

り、世界中のマス・メディアによって恐ろしい人工的なコンセンサスが日毎作られて行く方向に向かっていますが、フロムはこのことをも予見しています。例えば、大衆相手に前もって作り上げられた、虚偽の購買欲、代理人の感情、浅薄な庶民感覚などを操った果てしない洗脳がそうです。未来の破局を思い描くフロムは、自由と尊厳の最後の名残りの上で揺れ、社会・経済の全体的・一律化の淵に身を投げかけている人間の姿を見てとっています。こうした予見の多くがすでに現実のものになっています。

しかしながら、フロムは、自己の活動全体を通じて、人類にはまだ希望があると主張します。すべての社会的性格は、あらゆる個人とその社会的相互作用全体の支配的特性によって形成される、というのがフロムの前提です。個人の行動や構えが一定の型からかなりはずれる時はいつでも集団の行動様式も変わる。したがって、社会規範や規制からの大きな逸脱はいずれも、社会的性格の変化が起こりうることを示唆しているといえるのではないかとフロムは考えます。これは、二一世紀の先進工業諸国に、もっと人間味のある善意と博愛に満ちた未来を期待してもよいということではないでしょうか。中部ヨーロッパや、米國（米國のほうはずっと少ないですが）はもとより日本でも、今日の若い世代は、これまでのもとは違った生活様式を模索し、表現しようとしています。過去二〇年の間に、こうした国々の多くの若者は物質主義とは全く無縁で、在るがままの姿を重んずるライフスタイルを見つけたてきました。精神的な価値と個人としての成長が強調される一方、伝統的な目標や規範が拒否されることが多くなっています。こうした動きのもっと大きな国際的背景には、既存の社会的性格が徹底変革をとげることへの期待があります。しかも、より良い社会を求めて変革に率先着手する新たな勇氣を取り巻く状況として、マックス・ホルクハイマー、ヘルベルト・マルクーゼ、セオドール・W・アドルノらによって創始され、エーリッヒ・フロムによって社会分析理論へと変容された「批判理論」の復活が見





られそうですし、また復活して当然と思われず。本書『評伝 エーリッヒ・フロム』は、脱工業化社会に自律的人間が生き残るといふ希望のグローバルな再生に、ささやかながらタイムリーな貢献ができることを希うものであります。

本書の原書が出版されてから、早四年の歳月が流れました。大方の書評は、この、エーリッヒ・フロムの生涯とその全既刊著作にわたる、英語で書かれた初の大がかりな分析に対して惜しみない賛辞を注いでくれました。この四年間に、エーリッヒ・フロムの活動やさまざまな個人的側面にかんする重要な研究が数多く出版されました。なかには、本書が提起した問題に大々的に取り組んだものもあります。しかし、こうした最近の研究にもかかわらず、本書で展開した私自身の立場を根本的に見直したり、修正したりする理由は全くないと思っています。もっと深く研究したい読者には、「国際エーリッヒ・フロム協会」(The International Erich Fromm Society, Ursatler Ring 24, D-72076 Tübingen, Germany)の活動に注目されるようお勧めします。この協会は、現行の研究の詳しい文献解題などを収録した年報と会報を発行しており、世界中から会員を募集しています。連絡は前記の住所で取ることが出来ます。

本書は、冷戦の終局段階に入った一九八〇年代末期に書かれたものです。その後、世界の政治舞台では数々の重大変化が起こりました。制度化された共産主義の崩壊によって、世界の国際的権力構造が根底的に変わりました。限られた地域紛争が連日人命を奪ってはいますが、大きな国際的規模の世界平和は手の届くところまでできているようです。核による人類の抹殺と地球の滅亡の恐れは、もはや遠のきましました。私たちはもう、東西双方の核弾道ミサイル庫が解体されること、そしてそれに伴い軍産複合体制の破滅的な命令から徐々に解放され、それにつれて既存の経済機構が再構築されていくことを期待して

いいところまで来ています。それと同時に、西側諸国も東側諸国も、相手方を「敵」と政治宣伝する像を抱き続けることはもはや許されなくなっています。政治家たちは、今世紀の大部分にわたり、そうした像を利用してあやふやな得点かせぎをしてきました。平和使節が活躍する時代が来たのです。そして世界の飢餓、病気、文盲をなくす超国家的努力を含めて、多くの平和活動が見られます。しかし、これらのグローバルな問題が完全に解決されるまでには、個々の国民が、フロムが言う「正気の社会」なるものの確立に向かってさらなる前進を遂げなければなりません。フロムの方法論——社会分析理論——については、本書をお読み下さい。フロム自身の信条——社会主義ヒューマニズムは、全ての読者に真剣に検討してもらふ価値のあるものです。現時点で、フロムの予言のいくつかが現実のものになったかどうかという疑問が提起されるでしょう。私は、なったと思います。共産主義プロットの崩壊は内部から、さまざまな人間の社会的性格の真正で根底的な変革から始まったことは明らかです。ミハイル・ゴルバチョフのような器量と才覚をそなえた政治家たちの登場は、この新しい生志向の社会的性格の現れです。これらの有望な事象に照らして、平和な未来と人間成熟を想定したフロムの予言的ヴィジョンは、今あらためて検証される必要があります。結局のところ、フロムの思い描いた未来はすでに始まっているのかもしれない。

一九九三年一二月 アメリカ合衆国 ソルトレイク市にて

ゲルハルト・P・ナップ



## はしがき

本書『評伝 エーリッヒ・フロム』<sup>x</sup>は、ごく一般の読者と専門家の両者にたいして話題を提供する。この本は、エーリッヒ・フロムの伝記、アカデミックな教師および精神分析家としての彼の著作、さらには英語で発表された彼の業績の全体についての初の大がかりな批判的評価として、ただ単にフロムを知ってもらうことを目指すだけでなく、読者が、今世紀のもっとも影響力のあった思想家の一人の遺産をめぐる論争に加わることを求めている。非専門家にたいしては、今進行中の論争への参加を促し、フロムの思想にふれることによって人生や社会について、自己の展望を改める究極の可能性をあたえるはずである。フロムほど、とくに第二次世界大戦後の時代に数多くの精神に触れ、そして広い読者層にたいし人間の条件について明晰な自覚をあたえた心理学者―社会学者はまずいない。他方、博学な専門家は、この本のなかに新しい挑戦的な議論を見いだすはずだし、私が望むことだが、論争的な議論は建設的に異を唱えることにつながるにちがいない。

※ 原題は『生きるという技術』(アート・オブ・リビング)だが、訳書は上記のようにかえた。

異議申し立てこそ、フロムの生涯を貫くエネルギーだった。顔のみえる社会主義(ヒューマニスト・ソシヤリズム)が、彼の信条だった。本書を書いている時期、上記のようなヒューマニズムと社会主義理論の両者はともに、しばしば誤解され、忌み嫌われさえした概念である。"博学"の人たちにたいしてすらマス・メディアが流す紋切り型の理論と誤った概念が、真理の座をうばっていたのである。エー





リッヒ・フロムと対話することは、そもそも、このような安易に組み立てられた陳腐な真理と偏見に袂を分かつことである。それは、「ソーシャリスト」とか「ヒューマニスト」というような述語を再定義することである。それはまた、今日のもろもろのイデオロギーと、それらの世界的規模での主張をよりよく理解するために、この両イデオロギーの挑戦を受け入れることである。フロムにとっても——そしてわれわれすべてにとっても、——ヒューマニスト・ソーシャリズム（顔のみえる社会主義）は、もしその真の潜在可能性が実現されるならば、西側および東側世界が生き残る事実上の最後の根拠なのである。周知のように、フロムの理論はしばしばユートピアに近い。しかし、世界がいくたびも証明してきたように、現実と理想は、一点に収斂することがある。エーリッヒ・フロムがしばしばユートピアンの装いで提示してきた現実の実態を説明することが、本書の目的である。フロムの「絶対不可欠な前提」は、内発的に変わり、より大きな規模で世界の進歩に備えることができる人間の能力である。その強さと限界が、以下の各章で論じられる。

本書の執筆に当たり、二つの大陸の記録書保管所と図書館で作業する必要があった。この本の完成に参与していただいたすべての人びとに多くを負っている。さまざまな分野の多くの同僚から、励ましと暖かい手がさしのべられた。これらすべての方々に感謝したい。私の学問上の師、マックス・ホルタハイマーとセオドル・W・アドルノにたいし弔辞を捧げる。私自身の人生の形成期に、私が勉強できたのはこの方々のおかげである。二人は私の「批判理論」にたいする私の熱意を焚き付けてくれたし、今もなお私は二人の知的遺産を負いつづけている。私の両親は二人とも大成した精神分析者だが、この二人が私に心理学への関心を呼びおこし、その学問研究におおきな支えとなっている。私はまたフランクフルト学派のすぐれた専門家ゾルタン・タールに感謝したい。彼は私にフロムの未発表書簡の一部を使

わせてくれたし、たえず激励してくれた。そして私の心からの感謝を妻モナ・ナップに捧げる。彼女の支えと批判がなければ、この本は陽の目をみなかつたらう。

全人類のより良い、より品格のある生活を求めるわたしの希いに共鳴するすべての人びと——現状に甘んじることをいさぎよしとしない人びとに本書を捧げる。

一九八八年一月 ソルトレイク市にて

ゲルハルト・P・ナップ



Property of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.  
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.  
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



# 目次

## 凡例

本文中(一)(二)……とあるのは著者の原注で、訳書の各章の末尾にまとめた。※とあるのは訳注で、本文の段落ごとにまとめた。

日本語版に寄せて ..... 7  
はしがき ..... 1

第一章 生の名にかけて ..... 15  
——遺産をめぐる紛糾

第二章 始まり ..... 23  
——フランクフルト、ハイデルベルク、ベルリン

第三章 社会研究所でのフロム ..... 43  
——フロムの思想の基礎

第四章 総合 ..... 65  
——『自由からの逃走』(一九四一)

第五章 精神分析、倫理、そして宗教 ..... 98  
——人間性信頼の信条に向かって(一九四四～一九五〇)

第六章 忘れられた言語——フロムの夢理論 ..... 129  
——禅、フロイト、マルクスの研究

第七章 悪について ..... 161  
——性格学と宗教におけるさらに深い探究(一九六四～一九七〇)

第八章 正気の社会に向かって ..... 194  
——政治思想家としてのフロム(一九五五～一九六八)

第九章 生きるということ ..... 225  
——フロムの一般向けの著作の再考(一九五六～一九七六)

第十章 深淵を覗き込んで ..... 270  
——人間の攻撃性の理論(一九七三～一九七五)

訳者あとがき ..... 295

文献目録 ..... 312

索引 ..... 320





貪欲と平和は相容れない。

——エーリッヒ・フロム『正気の社会』一九五五

社会全体とその経済状態は、悲劇的に結びついている。こうした状況は、情け容赦なく、現代人を自由や冷静さや自立心のない大人にする。つまり、あまりにもいろんなものが欠けているために、人間性そのものを失った人間に。

——アルベール・ジュヴァイター『文明の哲学』一九四九

歴史上はじめて、人類の存亡は人の心の根本的変革にかかっている。だが、人間の心の変革は、心の変革の機会と変革をなしとげる勇氣とヴィジョンをあたえるような根底的な経済と社会の変革が起こってはじめて可能となる。

——エーリッヒ・フロム『生きるということ』一九七六

「悪」のなかにまっとうな「生」はない。

——セオドール・W・アドルノ『ミニマ・モラリア』一九五一

## 第一章 生の名にかけて——遺産をめぐる紛糾

『生の名にかけて』<sup>(1)</sup>——これは、エーリッヒ・フロムの友人、同僚、弟子たちが、フロム七〇歳の誕生日を記念して彼に捧げた論文集に、まったくふさわしいタイトルである。事実、フロムの全著作を、さらには今世紀のもっとも影響力あるヒューマンリストのひとりである彼の多岐にわたる全活動を概観してみれば、彼が自分自身とその仕事を一貫してただひとつの目的に捧げていたことがわかる。つまり、全人類の、より豊かでより尊厳に満ちた生を願う、偉大な構想力に貫かれた希望の普及に。

けれども、このようにいかにも無難な一般化——大方の一般化がそうであるように、おそらくそれは称讃者からも批判者からも等しく受け入れられるものだろう——を別にすると、フロムの偉大さと影響力について合意されていることは、これまでのところほとんど、いや、まったくない。フロムは、五〇余年にわたる研究生活のあいだに、多数の論文、書評、講義はもちろん、二〇冊ほどの本を書いたり編集したりしている。これらの本は、フロイト以後の心理学者／社会学者よりも、むしろ専門家でない一般の人のあいだで多く読まれている。それらは、合衆国では一九五〇年代以降広く読まれ議論されており、またヨーロッパにおいてはやや遅れて一九六〇年代半ばに一般に知られるところとなった。合衆国においてもヨーロッパにおいても、それらは熱烈な喝采と厳しい批判を引きおこした。この、現在も続いている、しばしば加熱気味の論争は、偏見にもついたものもあれば合理的なものもある。フロムの



敵対者は、好んでフロムを「おとな向けのスポック博士」とあざ笑う。今世紀のもっとも影響力ある思想家のひとりであるヘルベルト・マルクーゼは、フロムを新フロイト派修正主義者と糾弾した。多くの学者は、科学的方法についてのフロムの理解をけなした。にもかかわらずフロムは、一九六〇年代のアメリカ全土にあふれた自己診断的な心理学の潮流から登場した、もっとも知名度の高い著者のひとりであり、弟子たちの内輪では理想家、さらには「預言者」(ライナー・フンク)とさえ讃えられている。全体的にみて、精神分析学と社会学におけるフロムの業績は、これまでのところ冷静な偏りのない評価を受けていない。この研究の主な目的は、そうした評価をするためのしっかりした基礎を用意することである。

フロムの称讃者と批判者とのさまざまな論争は、疑いなく、フロムの業績それ自体が含む矛盾から生じている。一生を通じて、フロムはレットテルを貼られることをかたくなに拒んだ。彼が専門家集団や政治集団と密接な関わり合いをもつことはまれだったし、もったとしてもたいていは短期のものだった。晩年のある時、フロムはインタヴューに求められて、自分自身を「無神論の神秘主義者で、ほとんどの社会主義政党や共産主義政党とは相容れない社会主義者で、まったくの非正統フロイト派の精神分析学者」と定義づけている。しかし、この滑稽な応答も、フロムの思想家としての一生と変遷に照らしてみると、事実として妥当する。それは、彼の一生を形づくる三つの本質的なパラドックスを表現しており、それをうまく要約している。つまり、フロムは強い信仰をもった合理主義者であり、西洋の資本主義に忠誠を誓いながらも、社会主義に熱烈な確信をもっていた。そして、人間の社会的行動についてのスケールの大きな、極めて非正統な理論と正統派精神分析とを結びつけたのである。

このようなフロムの思想と世界像、全体の基礎は、疑いなく、彼の家族背景や多感な子ども時代に育ま

れている。彼は、正統派ユダヤ教徒の家族に生まれ、十三歳の時に本格的なタルムード研究を始めた。このことは、単に彼をフランクフルトのユダヤ人コミュニティの指導的メンバーと引き合わせただけでなく、後の人生と著作の道徳的な基礎を築き上げるものとなった。公式には、フロムは一九二六年に正統派ユダヤ教の信仰を捨てているが、生涯にわたって正統派ユダヤ教教義の全般的な影響下にあり続けた。彼の思想は、ユダヤ人としての躰けから、また、旧約聖書とタルムードの詳細な研究から形成された神秘主義的核心をけつして失わなかった。彼の議論に常につきまとうた道徳律は、明らかに、タルムード解釈の所産と見なされねばならない。

フロムは後期の著作になると、このような道徳的視点から、しばしば学問的アブローチの厳格さを失い、社会病理を客観的に分析するだけでなく非難するようにさえなる。この道徳的色彩のゆえに、彼の本——しばしば科学と娯楽のごった煮と批判されてきた——は、心理学や社会学の理論書が通常獲得するよりもずっと多くの読者を得ている。フロムの著作をきわめて効果的で説得力あるものにしてるのは、その論理ではなく、人類には不幸を脱して地上に黄金時代を築く潜在力があるという、理性を越えた信仰である。より良い世界に向かう、来たるべき前進へのフロムのたゆまぬ信念は、赤い糸のように、彼の本の中心を貫いている。

フロムは、死の直前のインタヴューで、子ども時代のユダヤ教とこれに固有なメシヤ信仰の内容に触れている。彼は、自分の成長にとってのその重要性を次のようにまとめている。

幼い頃から、わたしを孤立と孤独から救ってくれたのは、預言者の観念、とくに次のような考え方でした。つまり、メシヤの時代への希望、そう、最後には救世主がより良い世界を作り上げるだろう





という希望でした。……このメシア信仰の主題は、二つの非常に重要なメッセージを含んでいます。第一は、人間性の完成を目指す宗教的メッセージ、つまり知性と宗教と道徳の規範のもとに生きることで。そして第二は現実世界の真の変革を目指す政治的メッセージ、つまりそうした宗教原理を実現する新しい社会の建設です。

二〇世紀には極めて多くのことが判ってきたにも関わらず、なおかつ人間性の内的刷新と「静かなる」革命をたゆまず求め続けていこうとするフロムの考えは、確かにユートピア的だと言えないこともない。だが、彼と政治（そしてとりわけ資本主義と社会主義のイデオロギー）とのかわりには、右の引用から想像できるほど単純なものではない。ここでもまたわれわれは、手掛かりを求めて、彼の子ども時代にその根を探らなければならない。ちょうど世紀の変わり目に生まれた彼は、第一次大戦前のフランクフルト市、とくに、彼自身の家族環境を指して、「中世世界」と呼んだ。これは、彼自身の用語法にしたがえば、近代資本主義社会に典型的な疎外と侵略の蔓延をまだ免れている世界を意味している。彼の最初の本、『自由からの逃走』には、中世都市国家に典型的なギルド集合体とは違った昔のままの同業者社会から、独占資本主義の時代へと向かう人類の大移動のさまがつぶさに描写されている。歴史的にはもちろん、このような推移はおおよそ宗教改革の時代にすでに生じている。しかしフロム個人にとっては、彼自身のフランクフルトでの子ども時代こそが前資本主義の最後の砦であり、そこには、中世世界の一部として、強固なヒエラルヒーと厳格なルール、旧態然とした道徳によって特徴づけられた、厳密なユダヤ人コミュニティがあった。この固く結びついたコミュニティのなかでは、ほとんどすべての人が安全な居場所と確固としたアイデンティティをもっていた。晩年何十年間かとりまいていた競争

的商業主義を乗りこえて「現実世界の真の変革」による新しい時代を求めようとしたフロム自身の希望は、こうして、失われた子ども時代に対するフロムの個人的探究と切り離せないものになっている。

現実の政治についてのフロムの最初の発言は、彼の一〇代、彼が「憎しみのヒステリー」と呼んだ第一次大戦の勃発を目撃した時に発せられている。社会主義への初期の傾倒は、一九一八／一九年のドイツ革命が失敗に終わった頃、いっそう強いものになった。しかし実際のところ、十八歳のフランクフルトの学生は、ボルシェビキヤスバルタクスやミュンヘン人民委員会にはほとんど共感していなかった。ここにも、パラドックスにとんだフロムの人となり明らかになる。つまり彼は、一方で革新思想に対して知的な支持を表明しているが、他方では組織的な政治活動に関与することは拒否したのだ。彼の生活誌が示しているように、フロムは常に社会変革を志向していたけれども、公然と政治運動に関わりをもつようになったのは、さらに四〇年あまり後のことである。が、その時でさえ、アメリカ社会党との公式の結びつきも、平和運動への心酔も、東の間のことだった。いずれも、幻滅で終わったのである。エーリッヒ・フロムは、いかなる種類の政党もしくは組織にも、けっして安らぐことがなかった。先に引いた、社会主義政党や共産主義政党とは相容れない社会主義者という彼の自己評価は、まさに的を射た表現だと言えるだろう。

しかし、これはコインの片面にすぎない。フロムが一九四〇年に降に著した一般向けの、あるいは学問的な著作は、ほとんど例外なく合衆国の社会構造の明晰な観察と分析に基礎づけられたものだった。社会のあらゆる側面に対するフロムの診断の行間には、資本主義社会への彼の批判を特徴づける、北アメリカで目撃された近代資本主義への強い愛憎関係が明らかに読みとれる。それどころかフロムは、この社会に破壊的傾向さえ認めていた。けれども、その後の彼は、現代世界に現存する社会主義システム



ERICH FROMM



のどれも支持できなかったし、彼自身がこれに代わる具体的な政治システムを定式化することもできなかった。それゆえ、彼の資本主義社会批判は、彼が被抑圧者に対して、権威の鎖を解き放ち、非人間的な世界から脱出しよう訴えるときになると、しばしば神話の世界に踏み込んでしまう。この訴えのなかで、現代の疎外された社会の多くの生贖たちにとってはそのような逃走がまったく不可能であるという事実を、彼はうまく言いつくろっている。より人間的な社会・経済的環境の進化を加速するための実践的な提案を示そうとするフロムの試み——例えば『希望の革命』(一九六八)——は、事実として常に彼の最大の弱点となっているのである。

エーリッヒ・フロムという人物および思想家に固有な第三のパラドックスは、精神分析学理論との特殊な関係にかかわっている。彼は、一九三〇年にフランクフルト社会研究所に心理学顧問として職をえている——彼が受けた教育の詳細については二章以下で説明する。同じ年、彼自身、精神分析の診療を開業した。これは、職業としては、例外的な中断をいくつか除けば、その後四〇余年にわたって続けられることになる。ただ、そうした中断のひとつは比較的早く生じた。一九三一年、彼は結核を患い、ダヴォスの療養所に一年以上にわたって滞在することになった。その後、彼は最初ツカゴに移住し、最後はニューヨークに落ち着いて、そこでまたすぐに診療を個人開業した。ジクムント・フロイトの一方的な影響下にあった最初の十年が過ぎると、フロムは徐々に正統派フロイト主義を退け、患者と治療者のいっそうダイナミックな関係を伴う独自の方法をうち立てていった。正統派精神医学やこの領域の同僚に対するフロムの声高な異議申し立てから、激しい論争が生じた——この論争は彼の死に至るまで続くことになる。その詳細は以下の章で論じよう。ここでは、彼が独自に開発した方法は、ユニークで、精神医学の正統のどの系列もけっして認めることのできないものだった、と言うだけにとどめておく。

エーリッヒ・フロムの生涯は、一九八〇年三月一七日の夜遅く、スイス、ロカルノ近くのムラルトという村で閉じた。彼は、人間の尊厳と自由の名にかけてたゆまぬ探究を続けた研究者であり、その業績は常に希望に鼓舞されていた。この本の目的は、フロムの生涯の業績が提起した問題を偏りのない眼で吟味し、同時にまた、そこに内在する矛盾をその源泉に遡りながら明確にすることにあり、そして、実際、それらは、ほとんどがわれわれの時代の主要なイデオロギーや、政治的矛盾を写していると言っていることがしばしばある。つまり、高度技術環境のなかには、深い溝がいくつもあり、ちょっと目には滑らかに見える薄い化粧板で覆われているだけなのである。今日ほどテクノロジーが未知の領域にまで達し、東西の対立が急速に進むとともに、世界の政治局面が情け容赦なく敵意を増大させている時代はない。フロムが他のいかなる社会学的文献よりも雄弁に診断した人間性の「死体的」(ネクロフィラス)要素は明らかに増大している。だが、これと明確に対抗する力、すなわち「生命愛的」(バイオフィラス)要素もまた成長しつづけている。これは、とりわけヨーロッパ——それは古い世界であり、またフロムの失われた故郷である——における平和運動の拡大やさまざまな「緑の」政党によって証拠づけられる。現代の世界状況が明らかになるにつれて、フロムの著作とこれを起点とする批判的論争は、新しい次元で言及されるようになってきている。

(一) Bernhard Landis と Edward S. Tauber 編集 'In The Name of Life: Essays In Honor of Erich Fromm' (New York: Holt, Reinhart & Winston, 1971)

(二) Don Hausdorff, Erich Fromm, 'Twayne's United States Authors Series, vol203' (New York: Twayne, 1972) p. 3 を参照せよ。

(c) *Die Zeit*, 21 March 1980. より。英訳は私のものである。特殊な場合なので、フロムの晩年のドイツ語の話し言葉の荒い語彙をやむをかわくしようにとはしていないが、この意味深い一節の中身は十分伝えている。  
 (4) フランクフルト学派の歴史にたいする入門書としては、Zoltan Tar, *The Frankfurt School: The Critical Theories of Max Horkheimer and Theodor W. Adorno* (New York: Wiley, 1977) 及び Judith Marcus 及び Zoltan Tar 編集の *Foundations of The Frankfurt School of Social Research* (New Brunswick: Transaction, 1984) の P. 1—26 の Zoltan Tar の "Introduction" 及び Martin Jay の *The Dialectical Imagination. A History of The Frankfurt School and The Institute of Social Research 1923—1950* (Boston: Little, Brown & Co., 1973) を見よ。

## 第二章 始まり——フランクフルト、ハイデルベルク、ベルリン

フランクフルトの街、その今世紀初頭の二〇年間は、エーリッヒ・フロムの初期の知的成長にとつて、とくに重要な鍵であったと見られる。中世以来貿易と商業の一大中心地であったこの街は、前世紀の末にすでに人口二十九万に達しており、一九〇五年にはこれも三二万になった。そのうち、ユダヤ人コミュニティは正味八パーセントを占め、これには多数の小商人のほか、多くの金融業者、医者、すべての分野にわたる学者などが含まれていた。フランクフルトにおける正統派ユダヤ教の中心人物たちは、おもに商人階級に属していた。フロムの家族は、古くからラビとタルムード学者の家系だった。エーリッヒ・フロムの父、ナフタリ・フロムは、一八六九年一月三〇日、ホムブルク・フォル・デア・フォエーエに生まれ、一九三三年二月二十九日の死後、エッケンハイマー・ラントシュトラーセにある古いユダヤの共同墓地に埋葬されている。彼は、著名なラビ、ゼーリッヒマン・ピンヒヤス・フロム博士（一八二一—一八九八）の息子であり、ふたりの祖父もいずれもラビだった。ゼーリッヒマン・フロム——フロムの父方の祖父——は、一八五二年から一八七五年まで、ホムブルク伯爵に雇われて、タルムード学者の地位にいた。彼は一八七五年、フランクフルトのウイリ・カール・フォン・ロートシルト男爵の招きを受けて、男爵のお抱えラビとして高報酬のポストについた。この転身は、彼に物質的な安定をあたえ、彼の一〇人の子どもの将来を保証した。しかし、ナフタリ、そして後のフロム（彼はこの祖父に





会ったことがない)の目には、ゼーリッヒマンが財政的理由から自由を売り渡したように見えた。そして彼は、この転身について家族から厳しく批判された。こうして、折々の軋轢が、フロム家のラビとしての家系に傷をつけることになった。

※ ユダヤの律法博士

ナフタリの妻、ローザ・フロム(旧姓クラウゼ)は、一八七七年一月二九日、ポーゼン(今日のボズナニ)に生まれた。ここは、エーリッヒ・フロムの両親が一八九九年六月一六日に結婚した街でもある。ローザ・フロムの父親は葉巻加工業者で、彼の兄弟、ルートヴィッヒ・クラウゼは、当時のもっとも影響力あるタルムード学者のひとりとして知られていた。クラウゼ家はもともとロシアの出身であったが、イギリス革命の時代に移民としてフィンランドに渡り、そこでユダヤ教に改宗している。ローザ・フロムは、夫の死後六年の後、息子のたつての懇願で、イギリスに移住した。一九四一年、エーリッヒ・フロムは無事その母親を合衆国に移住させた。それ以後、彼女はニューヨークに住み、一九五九年二月二六日に没した。こうしてローザ・フロムは、国家社会主義のもとでヨーロッパの何百万というユダヤ人たちが遭遇した運命を免れたのである。

エーリッヒ・ゼーリッヒマン・フロム——このミドル・ネームは祖父に敬意を表してのものであった——は、一九〇〇年三月二三日、フランクフルトで生まれた。彼は一人息子だった。同じ年にはレオ・レーヴェンタールが、また三年後にはセオドル・ヴィーゼングルントIIアドルノが、いずれも同じ街で、著名なフランクフルトのユダヤ人家族のもとに生まれている。彼らの歩みは後にフロムのそれと交わることになる。エーリッヒが生まれた時、両親は、アルトケーニッヒヒブラッツとパルメンガルテンに近い、ケーニッヒシュタイナー・シュトラッセの四九番地に住んでいた。一家は、一九〇三年、この

通りに並行するリービッヒシュトラッセの二七番地にある大きなアパートに移った。エーリッヒはここで育つことになる。

ナフタリ・フロムは、ちっぽけだが繁盛している果実酒の店を持っていた。当時の写真からは、脆弱で明らかに内向的なパーソナリティがうかがえる。彼の政治的宗教的信念は、紛れもなく保守的だった。彼が商人という自分の職業よりもラビとしての人生を望んでいたことは明らかである。この点から、彼は青年エーリッヒに、宗教的な正統と正義にしっかりと固められた「中世的な」人生観を植えつけたのだった。エーリッヒの父親は、ユダヤ人ヘルマン・コーエンの記念館の共同設立者のひとりとなり、一九二四年から一九二五年まで館長を務めている。

この結婚生活においては、フロムの母ローザ——旧姓クラウゼ——の方が力をもっていたようである。フロムは晩年に、両親を「神経症」で「極度に心配性」だったと記している。両親はともに、ほとんどヒステリーのように、たったひとりの子どもの安寧を気にやんでいたようだ。エーリッヒの父は、エーリッヒが最初、タルムード学者になりたがっていたのを支援していたが、リガに行ってそこで研究したいというエーリッヒの願いはけっして許そうとしなかった。ローザ・フロムは、明らかに夫を慕ってはいなかった。彼女は夫の政治的・宗教的保守主義を認めようとはせず、息子の将来については夫とまったく違う考えをもっていた。つまり、エーリッヒを有名なピアニストにしたかったのだ。一九一八年、フロムは誉れ高いヴェーラー高等学校を卒業するとピアノのレッスンをやめてしまった。母親は不承不承その夢を捨てたのである。

青年期にさしかかろうとするエーリッヒ・フロムの目には、その父ナフタリが、「中世」世界と「近代」世界との葛藤を、つまり、ほんとうは就きたかったラビの職と実際に自分の家族を養っている商売





の世界との葛藤をさけて生きようとしているように映った。このことが、他の点では基本的に幸福な子ども時代の、唯一大きな不協和音だった。フロムは死の直前のインタヴューで、この葛藤をまた次のように簡潔に述べている。「父は商人であり、そのことを恥じていました。本当はラビになりたいと思っていたからです。私は、子どもながらに、誰かが「私は商人だ」と言うのを聞くと恥ずかしくなりました。お金を稼ぐために全生涯をかけねばならないと認めざるをえないなんて、なんて恥ずかしいことだろうと思っただけです。そしてそれは、中世的な物の見方であって、近代的なそれではなかったのです」。

この、昔ながらの前資本主義世界と近代消費社会との不一致は、単にフロムの少年時代の家庭生活を特徴づけていただけでなく、赤い糸のように後年の諸著作を貫いてもいる。『自由からの逃走』(邦訳)(一九四一)<sup>3)</sup>に示された人間性の発達をめぐるフロムの理論の基礎となっているのは、この区別である。それ以後、この区別は独占資本主義をめぐるフロムの批判の礎石として結晶している。その考えは、一九七六年に書かれた『持つべきか、在るべきか?』(邦訳『生きるということ』)のなかで、存在をめぐるふたつの正反対の概念、持つことと在ることの二極対照において、もっとも鮮明なものとなった。

エーリッヒ・フロムが、少年として、また青年として、一方で父親の商人としての生活を積極的に手伝いながら、同時にまたそれを恥ずべきものとして段々と拒絶するようになっていたとき、彼は、彼自身の後の生涯を、そして、アメリカ資本主義に対するやむにやまれぬ愛憎関係をも、ある程度まで予示していたわけである。

生徒としてのフロムには、勤勉さと才能とに際立つものがあつた。高校時代の彼は、とりわけラテン語、フランス語、そして英語に優れ、一九一八年には卒業試験に優等で合格した。一三歳の時、彼は、ラビであるヤーコフ・ホロヴィッツ博士の指導のもと、家庭とシナゴグ「ユダヤ教会堂」でタル

ムードの学習を始めた。彼はまた、七〇歳の大伯アルトヴィッヒ・クラウゼからも教えを受けた。後にフロムの教師となった人々には、ベルネブラッツの新しいシナゴグの名高い神秘主義者ネヘミア・アントン・ノーベル博士、さらにはハイデルベルクの社会主義者ザルマン・パールフ・ラビンコフ博士がいる。フロムは一九二六年までタルムード研究に日々専心した。けれども、その後は正統派ユダヤ教から徐々に離れていった。しかし、こうした研究からえられた諸々の洞察は、やがて統合され、これが後の全著作の強い道徳主義的力点として反映されていった。後の旧約聖書の教えについての研究

『汝、神のごとくあれ』(邦訳『ユダヤ教の人間観』)(一九六六)では、著者みずからが、このユダヤ教から引き継いできたものを強く強調している。さらにまた、フロムの正統派放棄については、ユーモラスな脚注を付けることができるひとつの逸話がある。それによると、この運命の一九二六年、フロムは——その頃にはミュンヘンでの精神分析の訓練を終えていた——静かに物思いに耽りながら、ジュエーと音をたてるポーク・ソーセージを山に盛った通りの露店の前にたたずんでいた。聖書のリンゴの木の前にしたイヴと同じで、彼もまた誘惑には勝てなかったのだろう。ソーセージを一本買い求めて、もちろん頬張った。そして、このことによって、フロムはもう戻れない地点を過ぎたのであり、子ども時代の楽園から自分自身を追放してしまうことになった。同じ年、彼はまた仏教との最初の短い出会いをしている。この宗教は、後に三〇年以上にわたって彼の人生で大きな役割を演じることとなる。そしてまた、生涯のずっと後の段階になって、彼は、中世ドイツの神秘主義者、神学者、有神論者であるマインスター・エックハルトの教えに戻っている。このような異質な学習の教々が最終的には混ざり合っ

フロムの初期のパーソナリティ発達には、彼がフランクフルトのユダヤ人社会で出会った人々の影響



が色濃く反映している。両親の家には、エルンスト・ブロッホが出入りしていた。ブロッホはフロムより一五歳上で、彼の著書『ユートピアの精神』(一九一八)を、フロムは高校時代に読んでいた。レビ・ノーベルを囲む学者サークルには、フランツ・ローゼンツヴァイク、エルンスト・ジーモン、ジークフリート・クラカウア(偉大な書『カリガリからヒトラーへ』の著者)、マルティン・ブーバーらがいる。彼らはフロムに強い印象をあたえている。フロムがメシア主義的社会的主義の考えに初めて出会ったのもこの脈絡であった。この考えが彼の思想にあたえた衝撃の大きさと言えば、ゲルショム・ショーレムが後にフロムを回想して、辛辣にも「精神分析家的ボルシェヴィスト」と書いているほどである。しかし、<sup>(8)</sup> 事實は、一九二〇年代の中頃になるまでフロムはマルタスの書いたものを実際に研究してはいない。それよりも先に、フロムはジークフリート・クラカウアの『科学としての社会学』(一九二二)を読んでいる。この書はおそらく、フロムがその研究生活で出会った他のどの社会学的理論よりも、深くかつ長期にわたる影響を彼に及ぼしている。

個人的な悩みや青年特有の悩みも含めて、早期の経験が、青年フロムに大きな影を落としている。よく知られていることだが、一二歳のフロムは、フロム一家の友人である若くて才能ある女性の自殺に激しく揺さぶられている。彼女は画家で、年老いた父親の後を追うように死を選んだのだ。彼女が死を選び、父親とともに埋葬されたことは、高等学校の生徒であるフロムには理解できないことだった。彼の眼からみた彼女は、若く美しく天賦の才をもった、人生の歓びを謳歌すべき人であって、故意の自殺などは考えられるはずがなかった。この出来事が、少年フロムを成長させる経験となったことは疑いない。なぜなら、この出来事はフロムに、あらゆる人間パーソナリティに作用する衝突しあう力、すなわち死への願望と生への意志をかいま見させたからである——まだ熟慮されてはいなかったが、フロム

はずっと後に、これらの力を、「生命愛的」因子、「死体愛的」因子として彼の精神分析理論のなかに取り入れることになる。

さらに圧倒的だったのが、第一次世界大戦を目の当たりにしたことだった。それは、オーストリアハンガリア帝国皇太子フランツ・フェルディナント夫妻が、一九一四年六月二八日、サラエボで暗殺された二年後に始まり、ヨーロッパ各地の戦線につきつぎと火がついていった。ヨーロッパの大部分の国では、この戦争への熱狂がひとしきり燃え上がった後、友人や縁者の死が、人々の愛国的熱情を急速にさましていった。覚めてみれば、大規模破壊の震撼させるような、それこそ粉みじんにされるような経験、塹壕での戦い、そして人間の生命の無意味な浪費は、前線にいる者、留守を守る者のすべてに深い衝撃をあたえた。十四歳という若さではあったが、フロムは、すでにこの時点で、彼が後に「死体愛」と叙述することになった現象の一部を既に見ていたに違いない。フロムは、一九六二年に書いた「思いつくことども」で、第一次世界大戦の衝撃をつぎのように述べている。

戦争が一九一八年に終わると、私は、戦争はいかにして起こったのだろうかと問い、人間の大量行動の非合理性を理解したい願ひ、平和と国際理解を激しく渴望して、悶々としていた。さらに、私は公式的なイデオロギーや声明のすべてに深い疑念を抱き、「すべてを疑うべし」という確信を抱くようになった。

フロムがフランクフルト大学で法律の研究を始めたのは、一八歳の時だった。その当時のドイツは、政治的激動の状態にあった。実際問題として、ドイツ第二帝国とその同盟諸国は、一九一八年一月一





一日の休戦以前に敗北していた。皇帝ヴィルヘルム二世はオランダに亡命し、社会民主主義者フライッブ・シャイデマンがドイツに共和制を宣言した。これに続く革命の混沌の数カ月間、さまざまな政治的党派が——そこには、スバルタクス団など、人民委員会政府の好戦的代弁者たちが含まれていた——覇権を求めて争っていた。その結果、一時的な統一が、ワイマール共和国に達成されたが、それは民主主義への脆い短命の試みであり、結局のところそれも国家社会主義がその独裁的な力を強めていくための踏み石となってしまった。フロムは革命のあいだ、まさに彼らしく、極左グループたちが宣伝していたような社会改革の必要性に原則的には賛同していた。けれども、先に述べたように、彼らの現実的目標にはほとんど、いやまったく共感しておらず、当時の政治闘争の残忍さを嫌悪さえしていた。こうしてみると、先に引いた、フロムは自称「ボルシェヴィスト」だったとのショレムの皮肉は、かなり割り引いて受け取られねばならない。共産党の指導者だったローザ・ルクセンブルグとカール・リーブクネヒトが極右義勇軍と反動的軍隊によって虐殺されたとき、多くの自由主義者は深く衝撃を受け絶望した。だがフロムは、友人の社会主義者たちとは違って、このような出来事についても、また、いつのまにかドイツ社会革命の失われた大義の象徴的殉教者にまつりあげられていたこのふたりの政治的指導者についても、何の言及もしていない。ずっと後になって、政治的著作の一部や、彼の傑作、『人間破壊の解剖学』（一九七三）（邦訳『破壊』）で、ほんのついでにルクセンブルグの名にふれている程度である。

一学期が過ぎると、フロムは、法律業務がけっして自分の天職にはならないだろうと確信した。彼は大学と専攻を変えた。一九一九年一月二日、彼はハイデルベルク大学に入学し、もっぱら心理学と社会学と哲学を学んだ。この時の教授のひとりに、哲学者カール・ヤスパーズがおり、その実存主義思想はフロムに長く印象を残すこととなった。もうひとり影響をあたえた教授に、新カント派の哲学者ハ

インリッヒ・リッカートがいた。リッカートはウォルター・ベンヤミンの師ともなった。この頃、フロムは社会学者アルフレート・ヴェーバーと個人的親交を深めており、彼は後にフロムの学位論文の指導教官になっている。アルフレート・ヴェーバーは、一九二〇年にミュンヘンで死んだ著名な社会学者、マックス・ヴェーバーの弟である。フロムがハイデルベルク時代にマックス・ヴェーバーの著作に親しんだことは疑いないし、後の著作にもしばしばヴェーバーを引いているが、どうやらヴェーバーはフロム自身の知的発達に直接の痕跡を残してはいないようだ。

学生時代のフロムは、学期の間の休暇はきままってフランクフルトで家族と過ごした。彼はそこで、ユダヤ人コミュニティに深くかかわっていた。卓越したラビ、ゲオルク・ザルツベルガーとともに、一九二〇年の二月、フロムはユダヤ社会教育協会の設立を手伝った。この協会の後援で、宗教と民族の諸問題についての講義が定期的にもたれた。最初の講演を行ったのはネヘミア・ノーベルだった。フロムもまたしばしばさまざまな話題について講義した。一九二〇年一月十七日、この協会の協力で、自由ユダヤ学校が設立された。その校長には、ユダヤ教の名高い哲学者であり、さらには——まったく奇妙なことだが——ヘーゲル主義の学者である、フランツ・ローゼンツヴァイクが任じられた。彼のいわゆる宗教教義の「常識的」解釈と、さらには、タルムード解釈への「実験的」で人道主義的なアプローチは、その当初からフロムを深く感銘させた。ユダヤ教とフロム自身との生涯にわたる非正統的な関係は、かなりの程度ローゼンツヴァイクに負うものと言って差し支えないだろう。自由ユダヤ学校は、まもなくフランクフルトのユダヤ人コミュニティの一流の人物が集ってくる場所となった。フロムはしばしば講義を引き受け他の活動にも参加した。また、フロムがレオ・レーヴェンタールに出会ったのもここである。レーヴェンタールは後にフロムをフランクフルト社会研究所のサークルに紹介することになる。社





会研究所の後のメンバーたちのなかでも、フロムとレーヴェンタールの著作だけが、一貫してユダヤ教に対する彼らの初期の忠誠を反映することになる。

自由ユダヤ学校を背景にして、マルティン・ブーバーのフロムへの影響が開いた。ブーバーのユダヤ教と実存主義との統合は、ある意味で、フロム自身の宗教と社会学との融合を予示している。一九二三年に名著『我と汝』を出版したブーバーを通して、フロムは、一定の社会的文脈における対人関係の重要性を自覚していった。フロムの初期の研究の焦点、つまり、特定のコミュニティにおける人間の相互作用は、事実上、主にこの頃のブーバーの著作の研究に端を発しているのだ。(フロムが自分の理論的焦点を人間性の全範囲へと拡大したのは、そう後のことではない。)このまだひよっここの学者に対するブーバーの影響の重要性は、この自称予言者とその若い弟子との個人的関係が実際には温かいものでなかったとしても、けっして減じられるものではない。しかし、フロムがブーバーから何を知的に負ったのかは、フロムの著作には明示されていない。

ユダヤ自由学校ではまた、フロムはゲルショム・ショーレムやウオルター・ベンヤミンに出会っている。フロムの交友サークルにはまた、エルンスト・ジーモンやナツフム・グラツァーがいた。二人とも自由学校の教師である。ゲルショム・ショーレムはつぎのような逸話を語っている。コチコチの正統派というフロムの評判から、友人たちは滑稽な祈りの詩を作った。「エーリッヒ・フロムのようになれますことを。そして、願わくは天国に行けますことを」。

エーリッヒ・フロムは、社会学の領域における正式の研究を、『ユダヤの掟——ディアスポラ・ユダヤ教の社会学に関する一考察——』と題した学位論文で終えている。この長大な研究は、アルフレード・ヴェーバーの指導のもとで書かれ、それには一九二五年九月四日と記されている(つまり、フロム

は一九二二年に博士号を受けたとする、広く知られている情報は誤りということになる。<sup>(9)</sup>これは、三つのユダヤ教セクト、すなわち、カライーム派、ハッンディーム派、改革派ユダヤ教における、社会心理的構造を探究したものである。おそらく、フロムにこの主題への最初の関心を植えつけたのは、ザルマン・ラビニコフだろう。ハイデルベルグへ移った後も、フロムはラビニコフと絶えず連絡をとっていたのである。ラビニコフ自身はハッンディームの出で、この特殊な集団について彼からたくさんのお話を聞いていたことは確かである。総じて、フロムの学位論文はユダヤの生活とコミュニティ内相互行為のヒューマニズム的基盤を強く強調するものとなっている。それは、ラビニコフ自身の哲学の中核でもあった。またこの論文は、ユダヤ教ディアスポラの歴史的重要性を、より大きな一定の民族的、文化的文脈から自立した自治単位として強調している。「ユダヤ教ディアスポラは、常にそれが依存する民族の大きな文明化の過程に統合されながら、それ自体の社会的文化的小宇宙のなかに個性と自律性を保持している。そして、それが逆に、ユダヤ教ディアスポラの均質な歴史的力としての存立を保證するものとなっている」。(10)この論文でフロムが採用した主な方法は、社会学的なもの(しかも、既に心理学的議論を自由に駆使している)であったが、後に関心を抱くことになる「社会的性格」という言葉や、それについての定義はここにはまだ見いだせない。結局のところ、この学位論文は、構成上の明晰さという点でも、また洞察の深さという点でも、特に卓抜したものとはいえない。むしろ、どちらかといえば退屈な読み物である。ただし、確かにいえるのは、この論文が、それでもフロムの後の研究方向への試験的で暫定的な第一歩とみなされるべきものだという点である。

一九二六年から一九二九年まで、フロムは、ミュンヘンではヴィルヘルム・ヴィッテンベルグの、またフランクフルトではカール・ランダウアーの指導のもとで、心理学と精神医学を学んだ。二人ともジ



タムント・フロイトの弟子だった。ウィットテンベルグはまた、エミール・クレペリンとともに研究していたが、クレペリンは、臨床的精神分裂症候群を初めて記述した人である。ウィットテンベルグは、フロムを教えた人のなかでもっとも正統派のフロイト主義者であり、そして、同時にもっとも影響をあたえなかった人物である。その後、フロムの訓練は、ベルリンの精神分析研究所で完了した。フロムはそこで、一九二九年から一九三〇年まで、精神分析の理論と実践を研究した。彼の学問上の教師のなかには、フロイト理論の厳格な支持者が少なからずいた。カール・アブラハム、フランツ・アレクサンダー、シャーンドル・ラドー、テオドール・ライク、ハンス・ザックスらである。フロム自身がジクムント・フロイトと個人的に会うことは一度もなかった。ベルリンの研究所のサークルで、フロムはカレン・ホーナイと出会っている。これを発端に、ふたりの精神分析家は長い親交を結ぶことになる。それは、一九三三年の秋、フロムがシカゴ大学に招聘されて講義をもつことにもつながる。研究所のスタッフには、社会学者ジークフリート・ベルンフェルトの他に、カール・ミュラー・ブラウンシュヴァイク、ハラルト・シュルツIIヘンケ、ルネ・シュビッツがいた。ヴェルヘルム・ライヒは一九三〇年に研究所に加わった。ライヒとフロムの交友は親密だったが、長くは続かなかった。ライヒは、しばしばマルクスとマルクスの理論の社会学への応用について講義した。フロムがマルクス主義理論に傾倒し始めたのはこの頃である。フロムは、一九二六年からマルクスを読んでいたが、彼が言葉の正しい意味で——やや論争の種になるところではあるが——マルクス主義者になったのは、まさしく、ライヒ、ヘンリク・デ・マンをしてももちろん、マックス・ホルクハイマーを通してだった。フロムはライヒとの親交を比較的早く絶っているが、フロムがライヒから負ったものについては、まだ適切な研究がなく、十分に明らかにされていない。

一九二六年の六月一六日、初めゴルデ・ギンスブルク(後のレオ・レーヴェンタールの妻)と結婚していたフロムは、同僚の精神分析家であるフリーダ・ライヒマン(一八八九—一九五七)と結婚した。フロムより一〇歳ほど年上の彼女は、ケーニヒスベルク(東プロシア)に生まれ、そこで学んだ。一九一四年に博士号をとった後、ドレスデンに行き、その後ベルリンの研究所で精神分析家としての訓練を受けた。フロム自身と同じく、彼女もハンス・ザックス、エミール・クレペリンのもとで研究した。フロムは既にハイデルベルグで、ライヒマンに出会っている。そこで彼女は一九二四年から精神分析のクリニックを開いていたのだ。このクリニックは、厳密にフロイト主義をめざすものだったが、さらにまた、正統派ユダヤ教の儀式によって営まれてもいた。そのため、この施設のドイツ名、治療所 (Therapeutikum) は、ここを訪れた者から、ふざけて「治療所」(Therapeutikum [Tora-peutikum]) と呼ばれていた。フリーダ・ライヒマンは、エルンスト・ジーマン、レーヴェンタールも、もちろんエーリッヒ・フロムも含めて、彼女の友人たちはみな、彼女の分析を受けなければならぬと主張した。けれども、も逆説的なことに、「治療所」の中心的人物の多くは、やがて正統派を離れることになる。フロムも、またライヒマン自身もそうだった。だが、そうなる前に、この分析家とその患者との間には既に深い関係が生じており、それがふたりの結婚となった。フリーダ・フロムIIライヒマンは、この若い精神分析家にとって、明らかに母親代わりだった。(彼女はまた、顔つきもフロムの母親にどこか似ていた。)フロムはこの最初の妻との協力関係のなから、実践的で臨床的な分析方法をかなり獲得した。けれども、彼らの結婚生活は幸福なものではなかった。それはわずか四年しか続かなかった。彼らは一九三〇年に別居した。もっとも、離婚したのは、ずっと後になってふたりがアメリカ合衆国に移住してからだった。アメリカでのフリーダ・ライヒマンは、メリーランド州ロックヴィルで仕事を続け、その後二〇年以上





にわたってこの国の一流の精神分析家のひとりに教え上げられた。

一九二六年の秋以来、フロムはフランクフルトの精神分析サークルと密接な結びつきを保っていた。彼の学問上の教師のひとり、カール・ランダウアーは、フランクフルトでワークショップ開催に尽力し、そこで行われた新しい方法や関連文献の検討が新進の分析家たちをひきつけていった。フロムは、妻やクララ・ハッペル、ハインリッヒ・メンク、フランチ・シュタインらとともに、そうしたワークショップのほとんどに参加した。このグループの雰囲気はくつろいだ和気あいあいのものだったが、その議論は徹底してフロイト主義的だった。一九二九年、マックス・ホルクハイマーの指示で、ランダウアーは精神分析学の「併設」研究所の設立をまかされた。この研究所は、設立から廃止までフランクフルト大学の援助を受けていたが、実質的にはこれよりもずっと社会研究所と密接に結びついていた。この併設研究所は、公式には一九二九年二月一日に開設され、そのスタッフには、所長に任じられたランダウアーの他に、ハインリッヒ・メンク、エーリッヒ・フロム、そしてフリーダ・フロム＝ライヒマンがいた。以後二年間、フロムは二週間ごとにベルリンとフランクフルトを往復した。フロムがフランクフルト精神分析研究所で最初に教えたセミナーは、適切にも、「社会学と宗教における精神分析の応用」と題されていた。フランクフルトの併設研究所で、フロムはジークフリート・ベルンフェルトやパウエル・フェデルン——ひところマルクスとフロイトの理論的統合を模索していた人物である——と密接な親交をもった。そこでまた彼は、ゲオルク・グロデックと出会った。グロデックは、著名な精神科医で内科医であり、心身症の理論の産みの親とも呼ばれてよい人である。グロデックはまた、シャーンドル・フェレンチとカレン・ホーナインの親しい知己だった。もしも当時、フロムがはじめて正統派フロイト主義の妥当性に疑いを抱いたとしたら、それはグロデックが、精神分析に対する、新しい、全体論的な、

そして徹底して革命的なアプローチをフロムに示唆したことによるものとみなされねばならないだろう。フロムはまた、ベルンフェルトとフェデルンを介して、精神分析研究所で、ベルギーの社会主義者、ヘンリク・デ・マンに出会っている。デ・マンは、一九二九年、フランクフルト大学から社会心理学の教授に任じられている。彼の著書、『マルクス主義の心理学』（一九二八）は、当時、ヨーロッパの学界にかなりの衝撃をあたえた。デ・マンはこの本で、マルクスの経済決定論の理論を、より非合理的で内発的なアクティヴィズムによって修正、あるいは逆転することをさえ説いていた。彼はすべての社会的政治的活動に対する主観的動機の優位を主張し、マルクスが援用していた、より客観的な、しばしば機械論的な心理学を退けようとした。デ・マンの研究は、マックス・ホルクハイマーと彼を囲むサークル——彼らは当時、フランクフルト大学で正統派マルクス主義の立場をとっていた——の心を掴むには至らなかった。それはフロムには少なからぬ衝撃をあたえたが、当時、フロム自身の、フロイトとマルクスを融合させようとする努力は、まだ実を結ぶまでにはなっていない。デ・マンが提起した主観主義が、ブーバーの実存主義的概念とともに、人間性の個人的性格と社会的性格に関するフロム自身の後の理論に吸収されていったのは明らかである。

一九二六年から一九三〇年までのエーリッヒ・フロムの生活を記録する生活誌的データをざっとなめると、フロムにとってこの時代が、明確に知的アイデンティティを求め、自己の探究と模索と追求の年であったことがわかる。この間、彼の究極の目標はまだ明確ではなかったけれども、さまざまな冒険を重ねることによってそれがだんだんと形あるものになろうとしていた。少なくとも、人生のどの方向に進めばいいかを明らかにしようとして「試行錯誤」を繰り返した結果、フロムは、その初期の思考に影響をあたえた多くのものを相互に関係づけたり、ことによるとそれらすべてをまとめて放棄さえし





た。先に述べたように、フロムは最後には正統派ユダヤ教から離れた。これは、フロムが一九二六年にミュンヘンで体験した精神分析の結果だった。同時に、あたかも神秘的靈感のあらたな源泉を求めるかのように、彼は一時仏教を信奉した。これは、フロムが一九五〇年代に再び立ち戻ることになる領域である。ともあれ、ベルリン精神分析研究所の学問上の師たち——彼らはみなフロイト派だった——の影響のもと、そして、もちろんフリーダ・フロム・ライヒマンの分析家としての発想を自分のものにしたから、フロムは一九三〇年代を迎えるまでの間、どこかしぶしぶながらもフロイト理論に忠実だった。

しかし、これをフロムは後に断固として拒絶することになる。つまり、最初はフロイトの性愛論と女性観に、またのちにはリビドー論、生と死の本能論、とりわけエディプス・コンプレックス論にわたるフロイトの精神分析と社会をめぐる評価全体に異議を申し立てたのである。けれども他方、フロム自身の分析的アプローチは、夢やノイローゼなどの重要性を認めるとともに、生涯一貫してフロイトの無意識の概念と性格の動的な定義づけとにしたがうものであった。フロムにフロイト主義を修正させることになったのは、最初はグロデック、ついで、人を動かさずにはおかない人格を備えたデ・マン（ちなみに、彼が一九二〇年代末のフランクフルトの知識人達のなかで果たした役割についてはほとんど明かさされていない）、そして、最後は、人類学者であり母系制の擁護者であったヨハン・ヤーコップ・バッハ・オーフェンの著作だった。フロムはまた、バートランド・ラッセルとヴィルヘルム・ライヒの考えもすみやかに吸収した。一九三〇年にフランクフルト社会研究所に加わるとともに、フロムは、かりそめながら自分自身の学者としての立場を初めて、しかしまだ控えめな形で明らかにしている。この立場は、彼の生涯を通じてきわめて大きく増幅・拡張するが、その基本的な輪郭はこの時にすでに確立していたのである。

フロムの初期の著作は、この自己の定義づけの過程を例証している。彼の学位論文はなお大部分が実証主義的方法にもとづいていて、学者的な態度はあまり出ていない。学位論文をもとに書かれた彼の最初の主論文は、一九二七年に刊行されている。それは、「サバト」と題され、フロイト自身が発行した雑誌『イマーゴ』に掲載された。スタイルもできばえも未熟ではあるが、それはすでに後のフロムの学究の方向を暗示している。まだユダヤ教に囚われてはいたが、この論文はユダヤの慣習のある側面を精神的分析的議論を用いて照らしだそうとする試みである。だが、実際には、もろろんだような洞察にはいっそう到達していない。これに比べると、フロムの二本目の論文は成功を収めている。「精神分析学と社会学」と題されたそれは、一九二九年、A. J. シュトルファーが編集していた『精神分析教育学雑誌』に掲載され、事実上、ふたつの学問分野の統合を目指す最初の決定的な一歩となった。この論文は、そうした統合の目標を、「人間の社会的、すなわち、技術的／経済的な発達と、内的情動構造とりわけ自我（ego）の形態における発達との関係」を探究することと定義づけている。

この短い論文は、フランクフルト精神分析研究所でフロムが担当した最初のセミナーを凝縮させたもので、一九二六年以降にフロムが経験した知的成熟の証しだといえる。家族は特定の社会規範の「産物」であり、しかもこの社会規範がまた技術の進歩に大きく依存している——フロムがそう述べる時、そこにはすでにフロイト主義的思考からのわずかな離脱が見てとれる。もっとも、論文はマルクス——フロムは彼を「もっとも偉大な社会学の天才のひとり（！）」と呼んでいる——からの短い、名を伏せた形での引用で結ばれているものの、カール・マルクスの名は、まだ言及されていない。マルクスの歴史／経済決定論がフロムの議論に十分組み込まれるのは、一九三〇年以降、すなわち、フロムがフランクフルト社会研究所に加わって以降のことである。



フロムのさらなる知的・学問的成長は、マックス・ホルクハイマーと彼を取り巻く若い知識人サークル——後に、「フランクフルト学派」や「批判理論」と呼ばれるようになった——に出会うことによつて、決定的で、また長期におよぶ影響を受けることになった。この研究所——部内者には単にそう呼ばれていた——の背景と業績についてはおびただしい本が書かれているが、ここでは二、三の点を指摘しておけば十分だろう。社会研究所は、ブロックンハイマー・ラントシュトラッセの街角からそう遠くないヴィクトリア・アレー——七番地にあった。この研究所は、もともと、一九二四年六月二日、マルクス主義の政治経済学者、カール・グリュンベルクによつて創立された。学生たちの間では、当時、「カフェ・マルクス」の名で通っていた。グリュンベルクは、一九二九年、健康上の理由で研究所の所長を辞任した。一九三〇年七月、この所長の地位を、三五歳のマックス・ホルクハイマーが引き継ぐことになった。彼は、その少し前に社会哲学の教授になったばかりだった。ホルクハイマーの同僚には、彼の生涯の友人となったフリートリッヒ・ポロック、経済学者のヘンリク・グロスマン、ユリアン・ダムベルツ、東洋学者のカール・アウグスト・ヴェイトフォーゲル、フランツ・ボルケナウ、ラインハルト・ゾルゲ（一九四四年に日本でソ連のスパイとして処刑された人物である）、ドイツ学者レオ・レーヴェンタールらがあり、さらに一九三二年からは、ヘルベルト・マルクーゼが加わった。卓越した哲学者、社会学者、音楽学者であったセオドル・W・アドルノ——第二次世界大戦後、批判理論のもっとも著名な代表者となった——は、一九三〇年代を通して研究所のメンバーたち、なかでもホルクハイマーと定期的な接触しており、彼とは親密な友人となった。しかし、アドルノは一九三八年まで研究所に正式に加わっておらず、その頃には、すでに研究所はニューヨークに逃れて活動していた。フロムが研究所に最初に加わったのは、レーヴェンタール——一九二六年から研究所で働いていた——の仲介によるも

のだった。二人は、かなり前に、ラビ、ネヘミア・アントン・ノーベルを取り巻くサークルで出会っていて、親交を続けていた。それ以後、フロムと研究所の接触は、隣接する精神分析の併設研究所でフロムが定期的に授業をもっていたため、自然に深まっていた。そして、一九三〇年、フロムがドイツ精神分析学会の準会員となり、また、ヘルリン市の中心部、バイリッシャー・プラッツに自分以上の診療所を開いたこの年、フロムはまた、社会研究所の精神分析顧問に任じられた。同時に彼は、研究所の心理社会研究部門の部長となり、これは、終身在職権を伴う地位であった。

- (1) 奇妙なことに、フロムのミドルネームはよく『ピンチャス』だと思われている。Erich Fromm, *Rowohlt's Monographie*, vol.322 (Reinbek: Rowohlt, 1983) p.14で著者であるマイナー・フンタも同様な間違いをしている。フランクフルト、マイン市の公文書館のアンダーナート博士のお蔭で、私はフロムの実際の名前を確かめることができた。博士にここで感謝の意を表します。
- (2) *Die Zeit*, 21 March 1980: 英訳は私のもの。(一章注cを参照された。)
- (3) E. Fromm *Escape from Freedom* (邦訳『自由からの逃走』(New York: Farrar & Reinhart, 1941) 5 特二二章一四章を参照された。)
- (4) E. Fromm *You Shall be as Gods: A Radical Interpretation of The Old Testament and Its Tradition* (邦訳『旧約聖書の人間観』(New York: Holt, Reinhart & Winston, 1966) の特二一―三章を参照された。)
- (5) フンク(注一)のp.44を見られた。)
- (6) Gerschom Scholem, *Walter Benjamin—die Geschichte einer Freundschaft* (Frankfurt: Suhrkamp, 1975) p. 285.
- (7) これについて、そしてそれについて詳しくは『The Credo Sense, Beyond The





- Chans of Illusion. My Encounter with Marx and Freud.* (邦訳『夢遊と覚醒』) (New York: Pocket Books, 1962) © "Intellectual Autobiography" (邦訳「闘争と自己」) を見よ。また、
- (8) *Beyond The Chains of Illusion*, p. 9.
- (9) Schelen, *Walter Benjamin* (社名), p. 149. ユーゲン・ワグネル『原典』(社名) "Mach mich wie den Erich Fromm, / Daß ich in den Himmel komm."
- (10) *Das Jüdische Gesetz. Ein Beitrag zur Soziologie des Diasporajudentums.* マイヤー・フランクの思想的な再考と Erich Fromm: "The Courage to be Human" (New York: Continuum, 1982) © p. 374. 274. 著者取得年は一九三二年とて間違っている。
- (11) *Das Jüdische Gesetz*, p. 11. 邦訳『夢遊』
- (12) "Der Sabbath", *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Natur- und Geisteswissenschaften* 13 (1927) : 223-234.
- (13) "Psychoanalyse und Soziologie", *Zeitschrift für Psychoanalytische Pädagogik* 3 (1928/29) : 289f.

### 第三章 社会研究所でのフロム——フロム思想の基礎

フロムが社会研究所に籍をおいたのは、わずか八年間、一九三〇年の着任から一九三九年一月の辞任までである。しかし、この少数だが秀才ぞろいの若いマルクス主義学者グループのなかで過ごした、そして特に、フロムが高く称賛するホルクハイマーと共同研究を進めたこの八年は、彼自身の方法をかなりの程度結晶化させ、かつまた発展させた。この間、フロム自身の精神分析的方法と社会学的方法のユニークな結合の基礎は堅固なものとなっていった。フロムはこのとき、真に自分の進むべき道を知ったのである。この八年間の業績は——いくつかの論文があるだけで一冊の本もないけれども——後の有名な著作に見られる本質的な思想のすべてを、すでに含んでいたといってもよい。このことについてはひとつの神話が広まっている。つまり、フロムの著述家としての経歴は一夜にして、一九四一年の『自由からの逃走』の出版とともに始まったというそれは、おおよそすべての関連研究から裏付けをえているようにみえる。けれども、これはまったく正しくない。フロムは、完成された著述家としての天分のきらめきだけで登場したわけではないからだ。それゆえ、この章におけるフロムの初期著作の分析は、彼の思想の段階的成長を明らかにし——それによって上述の神話は即座に消えてなくなるだろう——フロムの初期のあまり知られていない学問的業績に読者を案内するためのものである。

スタイルと方法論の見事さからいって、フロムの一九三〇年代の発表論文は、その時、彼が学者とし





ての成長のピークに達していたことを示している。これらの論文の大部分はまだ英語に訳される予定もなく、ただドイツ語に堪能な読者しか触れることができない。面白いことに、彼の後の本（そのほとんどすべてが最初は英語で出版されている）がしばしば示す体系的欠如、さらには散漫性はこれらのドイツ語の発表論文にはほとんど見られない。このことが、そうした論文の厳密に学問的な構成によるのか、それとも、ホルクハイマー——彼自身が第一級の書き手であり名文家であった——が研究所の機関誌の手綱をしっかりと握っていたからなのかについては、まだまだ議論の余地がある。（『社会研究誌』はそれが刊行されていた九年間「一九三二年から一九四一年まで」ずっとホルクハイマーが編集していた。）

健康を害したフロムは、一九三一年から一九三二年まで研究所での仕事を中断し、一年以上にわたってダヴォスのサナトリウムで結核を治療することになった。一九三八年に二度目の発作を起こした時も彼はまたダヴォスへ行き、回復まで数カ月滞在した。きわめて洞察力のあるフロムの伝記作者であるライナー・フンクによれば、ゲオルク・グロデックはこの病を正確にも心身症的なものであると診断している。それによれば、原因はおそらくフロムとフリーダ・フロム＝ライヒマンの結婚の破綻にあった。なぜなら、彼らの別居と同時にフロムが発病したのだから。むしろ、たとえそうだとしても、そのような伝記的結びつきを証明することは、困難、いや不可能である。ダヴォスで静養中のフロムは、無為に過ごしてはいなかった。研究所の機関誌の創刊号に掲載された二つの主要な論文（以下で論ずる）、少なくともその一部は、スイスで書かれたものに違いない。

この重要な時代におけるフロムの学問的業績、そして、研究所のなかでフロムが果たした役割について詳しい検討に入る前に、今日の読者にはひとつ注意しておくほうがよいことがある。先に述べたよう

に、この研究所は、カール・グリュンベルクによって創設されて以来、ホルクハイマー時代、さらにはアメリカ亡命から戻ってからのずっと後に至るまで、もっぱらマルクス主義理論の研究と、社会生活ならびに社会的相互行為のほとんど全領域へのその応用に専心していた。一九五〇年代の半ば以降、研究所の方向性はやや変わったようだが、その後の研究所の歴史は本書が問題にするところではない。今日のアメリカの読者にとって、各自がマッカーシー時代の洗脳や、冷戦プロパガンダのスローガンを浴びてきたかどうかは別として、このマルクス主義思想への専心は、国家を転覆させようとするもの、あるいは、少なくとも胡散臭いものだったように思われるかもしれない。けれども、ひとつ心にとめておかねばならないのは、一九三〇年代には今日の二極分化した超大国とその衛星国家群は存在しなかったという事実である。さらにマルクス主義は、アメリカとヨーロッパの知識人サークルの多くでは、資本主義に対して、またとりわけ過激なファシズムに対して、実行可能な代替案を提起した社会哲学理論と見なされていたのである（今日においてもそうである）。マルクス主義そのものが、当時「マルクス主義」国家を宣言した唯一の国家であったソヴェエト連邦の党路線と同一視されることはまったくなかった。それどころか、研究所のメンバーの多くは、東ヨーロッパの、より正統的な共産主義の御用学者たちから、「修正主義者」と糾弾されている。哲学的な用語である「マルクス主義」が政治的に使われ、みさかにもなく「敵」側、つまり非資本主義世界を指すものとされるようになったのは、第二次世界大戦後、とりわけ合衆国においてなのである。さらに近年、デタントが終焉したあとの保守的政治家たちは、マルクス主義の教義にしたがっていると目される人たちとその政府を、反キリスト者で「われわれと同じ道徳を受け入れない」やつらと決めつけることによって、そうした混乱に輪をかけてさえいる。こうしたことの前には、せいぜいのところが支離滅裂の思考や故意の歪曲の産物であり、へたをすると、第三





次世界大戦につながりかねない。人はマルクス主義者であると同時に、敬虔な宗教的倫理的的存在でありうることは、くりかえし——それもエーリッヒ・フロムその人によって——強調されてきたことである。マルクス主義の思想とそれがフロムの理論に果たした役割とをめぐる以下の議論のためには、マルクス主義の理論的側面を、政治宣伝による告発からも、また、今日の社会主義もしくは共產主義の国々に見られるその後のマルクス・レーニン主義の、より実践的な側面からも分けてみるべきである。

マックス・ホルクハイマーは、後に「批判理論」と呼ばれることになるものの創立者である。彼がこの語を初めて使ったのは、一九三七年のことだった。一九三二年から一九四〇年までに『社会研究誌』に掲載された、一ダースほどの極めて洞察にとんだ論文のなかで、ホルクハイマーはこの考えの課題と方法を定義づけている。おおまかにいって、批判理論とは、ヘーゲル哲学の一定の中心的要素とマルクスの思想の特定の側面との融合である。だが、ホルクハイマーは、マルクスとは異なって、プロレタリアートに、いや、いかなる特定の階級にも特別な役割をゆだねることはなかった。批判理論は三つの焦点、つまり(1)社会の経済的基礎、(2)個人の心理学的発達と形成、そして(3)文化の領域をめぐり、より深い理解を求めて、理論的分析と実践的貢献を試みている。このように理論と実践の密接な相互関連を宣言することによって、批判理論はさらに、資本主義社会——やがて自然崩壊することになるはずのシステム——のなかの個人に典型的な、精神的、経済的不毛の克服を目指した。ホルクハイマーは、新しい人間的な社会構造の創造によって、究極的には現代人がその宿命と融和すること、つまり、生の歎びと尊厳を回復したいと考えた。このような批判理論の基本的教義の説明(実のところ極端に単純化されたものだが)から判るように、ホルクハイマーは、マルクスの革命的情熱に替えて(時に生じ

る革命的变化の可能性は排除しないまでも)、より進化志向の社会改良という概念を据えた。このような「内からの」変化という課題が、強い倫理的響きを帯びていたことは明らかである。

フロムが一九三〇年に研究所のスタッフに加わるずっと以前から、ホルクハイマーは、批判理論という大きな枠組みのなかに、社会的要素をもった精神分析を入れることの重要性を認識していた。フランクフルトのカント学会で行われた「歴史と心理学」と題するプログラムの基調講演のなかで(これは後に『社会研究誌』創刊号に掲載された)、ホルクハイマーは、「専門的な集団心理学」の課題は、個人からなる社会階層の心理構造の徹底的研究にあると論じている。すなわち、「ある一定の歴史時代を分析する鍵は、心理学的な力と傾向、つまり、さまざまな社会階級の成員たちの性格と可変性を認識することにあり」ところで、ホルクハイマー自身、長期にわたってカール・ランダウアーから精神分析を受けていた。彼は、即興の話ができず、草稿なしでは講義ができなかったからである。それは、学者という職業にとっては、深刻だが、しかし特に珍しくない障害である。もちろんこの精神分析は成功している。(筆者は、フランクフルトの学生として、ずっと後にホルクハイマーの講義を何回か聴く機会をえた。その頃すでに名譽教授になっていたホルクハイマーは、自由闊達に講義していた。もっとも彼の話しぶりは、聴衆を困惑させることはなかったとはいえ、同僚のセオドル・W・アドルノのたぐいみたいな能弁さに肩を並べるほどのものでもなかった。学生たちを強く魅了したのは、ホルクハイマーの講義の実質だったのである。)先に引いた論文のなかで、ホルクハイマーは、明確な定義こそしていないが、「社会的性格」という現象に直接言及している。それは、フロムの後の仕事で深く言及されることになる現象である。

『社会研究誌』の同じ創刊号には、フロムの論文「分析的な社会心理学の方法と課題」が発表された。こ